1949年９月17日第三種郵便物認可　毎月10日発行　第658号（通巻1162号）　定価１部40円

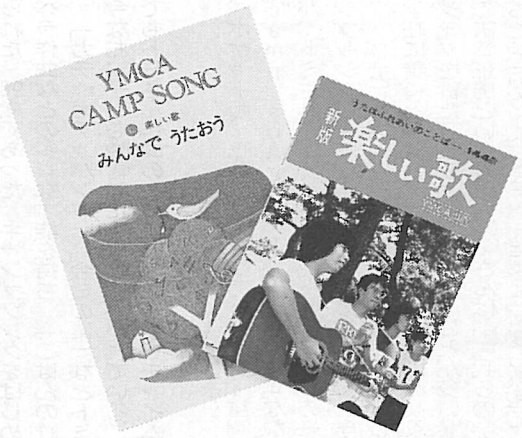
創立1880年
東京YMCA
2008 7/8 月号
発行所　東京キリスト教青年会　発行人　新井廣和
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命
東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

We build strong kids, strong families, strong communities.　*YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。*

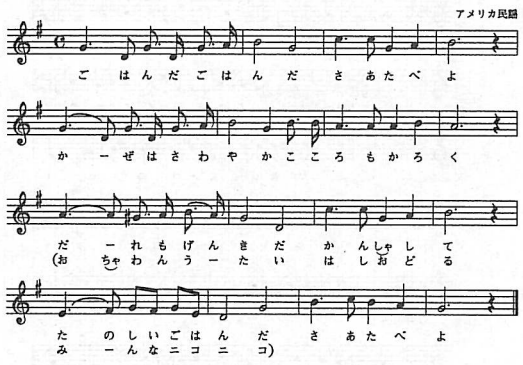
緑の山陰に、キャンプの歌が響く季節。一緒に歌ったキャンプソングは、共なる楽しい生活の象徴のように心に残ります。「いつでもどこでも」、それは私たちの心を平らかにし、励まし、豊かにします。

しばらくの間、キャンプの歌に耳を傾け、口ずさんでみませんか。



提供　日本ＹＭＣＡ同盟出版部

ごはんだごはんだ



（「みんなでうたおう」から）

キャンプソングはどう定義されるのだろうか？ポップス、オリジナル曲、唱歌等々、色々な曲がある。難しい議論はさておいて、ここでは単純に、キャンプ生活で歌われる歌ということで話を進めたい。

キャンプソングは様々な効用を持つ。集中する。一体感を育てる。楽しさを感じる。うれしさが湧き上がる。意欲がおきる。「みんなの声が重なり合う」と歌われているように、違いのある一人ひとりが集まって出来上がるキャンプそのものを表しているとも言える。

キャンプ（場）には、固有の歌が育つ。野尻のトミソングはＹＭＣＡでは有名だが、「静かな湖畔」も東京ＹＭＣＡ野尻キャンプで生まれた。前橋ＹＭＣＡ赤城キャンプには50曲を数える赤城ナンバーソングがある。ＹＭＣＡ山中キャンプで作られた歌も数知れない。

ホノルルＹＭＣＡ・アードマンキャンプ場では、楽しいキャンプファイアの後、スタッフが一人ギター片手に、キャンプの歌をうたう。じっと聞き入る子どもの姿は印象的である。

私の手元にいくつかの歌集がある。戦後、同志社大学の学生を中心に歌われたのであろう歌集には、英語の歌が多くまた賛美歌も多い。ＹＭＣＡのたのしい歌は１９５０年のものから１９９４年まで４種類ある。古いものには英語の曲も多いが、だんだん日本語の歌が多くを占め、世界の歌も増えていく。新しくなるとギターコードが記されているのも興味深い。

歴史のあるキャンプの多くにはピアノが設置されている。礼拝やキャンプソングの伴奏に用いられたのだろう。１９６０年代、モダンフォークソングの流行と共にギターやバンジョーが登場する。曲想もそれに合わせて変化していく。「この世界はぼくらのもの」と大声で歌った人も、多いことだろう。この時代、ギターはまるでプログラムリーダーの必修科目だった。

野尻でも小学生キャンプでは、ピアノ、バイオリン、フルート、ギター、パーカッション等の楽器／無伴奏を、キャンプソングによって使い分ける。どういう曲の流れで構成すれば、初めてのキャンパーでも楽しく参加できるか、とディスカッションが重ねられる。また、キャンパーの書いた詩に曲をつけて皆で歌うプログラムも楽しい。

東京ＹＭＣＡ学院長
飯　忍

フロストバレーＹＭＣＡキャンプ場では、１９６０年代に人気のあったフォークソンググループのメンバーが、スタッフとして音楽の指導に当たった。それぞれに思い入れがある。

１９８７年、赤城キャンプでは、「正しく」「楽しく」を目指して、キャンプソングテープを作って日常的に耳にする試みを始めた。これは後にリーダーズフォーラムで紹介され、同様の運動があちこちのＹＭＣＡで広がった。

心ひらいて　耳をすませば♪
キャンプソング♪が聞こえる

こうやってみると、キャンプソングは、キャンプの文化そのものである。キャンパーをどう理解し、どのように一緒に生活しようかの表れである。それは、歌う、聞く、奏でる等様々な形で一人ひとりの個性が参加し存在できる、キャンプソングそのものの特徴でもあるだろう。

日本中のＹＭＣＡキャンプで一番たくさん歌われているのは、何だろうか。おそらく、〝ご飯だご飯だ、さあ食べよう♪〟で始まる「ごはんだごはんだ」に違いない。

十何年か前のこと。通っている教会のある日曜の礼拝後、作家の阪田寛夫氏にお目にかかった。富岡正男氏（トミさん）にお会いしたいと言われ、当時の野尻キャンプ担当主事と連絡を取って段取りをつけた。「ご飯の歌」の話だったという。

後日、「おちゃわんは歌い　はしおどる（略）」という歌詞が「誰も（が）元気だ　感謝して（略）」と、トミさんによって訂正されたことが確認された。（この経緯は阪田寛夫著「讃美歌こころの詩」＝日本基督教団出版局に詳しい）。

食事は、人が生きていくための大切な営みである。そして、キャンプ社会では、大切な、皆が集う時であり場でもある。単に餌をついばむための時ではない。

「誰も（が）元気だ　感謝して」という詞には、見事にＹＭＣＡキャンプ生活の方向が反映されている。「一人ひとりが生き生きと存在しています。神様ありがとうございます」である。楽しさは、感謝に、うれしさにつながるのである。

キャンプソングは、そのキャンプ社会（共同体）の歌である。そこに存在している楽しさ／うれしさの音楽である。メロディが、ハーモニーが、リズムが、それぞれの参加者に合わせて表現される。そして、良いキャンプソングは、「時を越えて」「どこでも」日常にあっても、存在する楽しさ／うれしさを知らせてくれるものなのであろう。

私たちを励まし　豊かに

50年前の歌今も
会員　河本晶介

「君のボーイズたちの歌うキャンプソングは、楽しいけれど、元歌とは一寸違っているんだナア」と、今から50年前、私がボランティアリーダーをしていた時に、武蔵野ＹＭＣＡ（当時）の故松野和夫主事に苦笑いされたことがある。

音楽に興味がなかった私が、耳からしか歌を覚えない者の悲しさで、正確ではないが、ひたすら楽しく教えていたようだ。

今も、懲りずに、勤務先の幼稚園での「夕涼み会」などでは、「クイカイマニマニ～♪」等を唄ったり踊ったり。そうかと思えば、毎週のように、息子の家で一杯飲んだあと、３人の孫たちの睡眠導入歌として「静かな湖畔」「キャンプの朝」「今日の業」「遠き山」などを必ず唄わされている。

歌は優しい魔法
会員　高橋　伸

30年程前、リーダーだった頃、中学生キャンプでバスが帰着する際に必ず「おもかげいろのそら」の大合唱となった。10数年前、都内のある区の八丈島キャンプでは「題のない歌」をテーマソングに色々な場面で歌った。２００２年の全国ＹＭＣＡリーダー研修会では「友だち、おひさま、優しい心」が、各地から集まったリーダーたちの心をひとつにした。

キャンプソングは瞬時に時間、空間、年代、あらゆるものを飛び越えてその時、その場所に戻してくれる、優しい魔法の呪文だ。

総主事室から
希望の光りを掲げましょう

◇「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入ってくる人に光が見えるように、燭台の上に置く／あなたの中にある光が消えていないか調べなさい」（ルカによる福音書第11章33・35節）

◇３年前、アメリカ・ニューオリンズに深刻な被害をもたらしたハリケーン「カトリーナ」。現地では、未だ再建のメドが立たない地域もあり、テントで暮らす人々や、家族を失い、アルコールや薬物依存の人もいると聞きました。自然災害による犠牲者のつらさは、かつて三宅島の噴火で被災し、全島避難した島民の隣人として東京ＹＭＣＡが働いた時に感じたことです。また阪神・淡路から新潟、宮城と大震災は繰り返し、悲しみの内に置かれた人々の傍らで働く私たちは、常に必要とされる存在でありたいと願います。

◇貧困の中に置かれた人、差別等でくやしい思いをしている人、夢も希望も明日のことさえも、見失ってしまった人々が日本にはいかに多いことかと、暗い気持ちになります。

◇先般、三宅島や支援ボランティアの人々と共に、国際部担当主事をサイクロン被災地・ニューオリンズへ派遣しました。

◇希望の光りを掲げ、常に研鑽を積み、強くそして優しいＹＭＣＡの光を、「入ってくる人」に提供しましょう。常に神様に必要とされる活動をしたいと考えています。（廣）

赤▽三角

今年も夏が来た。野尻で、山中で、赤城で、妙高…で、全国津々浦々のキャンプ場で、蝉に負けない大きな声の歌が響き渡っていることだろう。キャンプソングはキャンプそのものだ。▼歌は人を元気付ける。歌は人を結びつける。歌は人に思い出をつくる。一人で歌うのもいいが、皆で大きな声を出して歌うのがいい。リーダー時代、一人で行う歌唱指導はいつも避けていたが（その役割は決して回ってこなかった）歌うのは好きだった。上手い人と一緒になって歌うと、不思議と力がみなぎってくる。▼カラオケのように小部屋の中で歌うのもいいけれど、やはり自然の中で歌うのがいい。〝恋愛の告白は昼間、外でしろ〟と言ったディレクターの言葉を思い出す。野外で歌うと本当の自分が見つかる気がする。風も星も炎も一緒に歌ってくれる気がしてくる。▼歌は長調（メジャー）がいい。気分を出して短調（マイナー）の曲を歌うのもいいけれど、明日への思いは長調に乗せたい。歌詞に否定語はいらない。歌の力で言葉の力を引き出し、勇気をもらいたいからだ。▼今でもキャンプソングを口ずさめば、あの時の友の顔やキャンプ場での日々が甦る。さあ今年も歌え、子どもたちよ、青年たちよ。歌と共に夢を語れ。友情を育め。都会にいる私たちまで、大きな声を響かせよ。〝この夏〟を〝あの夏〟にするために。

（会員　廣田康人）